

かわせみ通信

発行：神奈川県自然環境保全センター
自然保護課

住所：神奈川県厚木市七沢657

TEL：046-248-6682

野外施設自然情報

バックナンバーは
HPから見られます→

自然環境保全センターの野外施設では、それぞれの季節に、生き物同士の巧みなつながりや、興味深い生命活動など、大自然の不思議な現象にふれることができます。
この「かわせみ通信」では、野外施設の出来事や生き物たちの様子を紹介しています。

野外施設トピックス

場 所	できごと
自然観察園	令和6年8月の台風により崩落、通行止めになっていた通路に迂回路を設置し、4月下旬から通行できるようになりました。 (崩落の様子は第38号で紹介しています。)



K5からK7Iに向かう迂回路

自然観察園に生息するカエルたち

沢や池などの水辺と林の環境がある自然観察園にはさまざまなカエルが生息しています。早春に産卵するヤマアカガエルやアズマヒキガエルが目立ちますが、雨が多くなるこれからの季節もカエルに出会うことがあります。今回は園内で確認されているカエルたちを紹介します。

●アズマヒキガエル（ヒキガエル科）

手のひらほどの大きさになる、日本最大サイズのカエル。3月中旬から下旬頃に一斉に産卵する「カエル合戦」が見られ、5月中旬頃に体長7mmほどの幼体が一斉に上陸します。



アズマヒキガエル



アズマヒキガエルの卵塊

●ヤマアカガエル（アカガエル科）

1番早く活動を始めるカエル。1月下旬から2月中旬頃の寒さが緩んだ日に一斉に産卵します。卵は粒状の塊で、産卵後に冷え込んで池の中で氷漬けになっていることもあります。



ヤマアカガエル



ヤマアカガエルの卵塊

●タゴガエル（アカガエル科）

沢の源流など伏流水がしみ出しているような環境に産卵するカエルで、姿を見ることは稀です。3月下旬から4月頃に谷戸の斜面から「グッグッ」と低い鳴き声が聞こえてきます。



タゴガエル



ムカシツチガエル

●ムカシツチガエル（アカガエル科）

背中にイボ状の突起があるのが特徴です。沢の中でじっとしているところをたまたま見つけることが多いです。

●ヒガシニホンアマガエル（アマガエル科）

田んぼや民家のそばでも見られるおなじみのカエル。谷戸で姿を見ることは多くありませんが、「グェグェグェッ」という鳴き声は春から秋頃まで聞こえます。冬に木の又の隙間で越冬している様子が見つかったこともあります。



ヒガシニホンアマガエル



越冬中のアマガエル

●シュレーゲルアオガエル（アオガエル科）

緑色で、体長は3～5.5cmとアマガエルよりも一回り大きくなるカエルです。4月に入ると「キリリ、コロロ…」という鳴き声が湿地から聞こえてきます。水辺の草の根本などに白い泡に包まれた卵塊を産みます。



シュレーゲルアオガエル



シュレーゲルアオガエルの卵塊

●モリアオガエル（アオガエル科）

姿や鳴き声はシュレーゲルアオガエルとよく似ていて、樹上に泡状の卵塊を産むのが特徴的なカエルです。全国的には絶滅危惧種に指定されている地域もありますが、神奈川県ではもともと記録は少なく、自然に分布したものなのか、人為的に移入されたものなのかははっきりしていません。近年、県内各地で確認され増加してきているようです。自然観察園では令和3年に卵塊が複数発見されて以降、毎年見られるようになりました。急激に目撃例が増えてきたため、人為的な移入の可能性があります。外部から生き物を放流することは、在来の生き物との競合など、将来自然観察園の生態系に影響を与えてしまうかもしれません。そのため園内でモリアオガエルの卵塊を見つけた場合は撤去するなどの対応をとっています。



モリアオガエル



モリアオガエルの卵塊

おたまじゃくしがカエルになるまで

3月のミニ観察会でヤマアカガエルのおたまじゃくしを観察し、5月まで展示室で成長の過程を観察しました。落ち葉などを食べて大きくなり、徐々に後足が生えてきて、最後に前足が一気に生えてくる様子を見ることができました。



いせはら公園緑花まつりに参加しました

5月9日、10日に伊勢原市の総合運動公園にていせはら公園緑花まつりが開催されました。自然環境保全センターでは毎年展示ブースを出展しています。今年も身近な自然環境や生き物に関心をもってもらえるように、伊勢原市内に生息している野生動物のはく製などを展示しました。

自分の住んでいる地域にくらす生き物の多さに驚く人もいたようです。



傷病鳥獣救護の情報

救護の情報やバックナンバーは、
ホームページで見られます。

神奈川県 野生動物救護



傷病鳥獣救護の業務として、県民の方により持ち込まれた県内の傷ついたり弱ったりした野生動物（鳥類と哺乳類の一部）を收容し、必要に応じて治療や野生に戻すことを目標にリハビリを行っていて、そうした野生動物の「救護原因」や「リハビリ状況」などの情報をこの「かわせみ通信」に掲載しています。

令和7年度 傷病鳥獣救護実績

令和7年度の傷病鳥獣救護実績について年間報告がまとまり、ホームページに公開しました。令和7年度は鳥類43種（不明種除く）318羽、哺乳類5種21頭、合計339件の受入れがありました。

種類別に見てみると、スズメやキジバト、ツバメなど私たちが日常でよく見る野鳥がとくに多く、次いでイソヒヨドリやタヌキなど市街地で生活、繁殖している動物が多いというほぼ例年通りの結果となりました。その他、鳥類ではトモエガモやクイナ、ツミ、ほ乳類ではキツネやカヤネズミなど希少な種として指定されている動物が保護される事例もありました。（カヤネズミについては第41号参照）

R7救護件数上位10種

	種名	数
1	スズメ	64
2	キジバト	36
3	ツバメ	35
4	ムクドリ	32
5	イソヒヨドリ	21
6	ヒヨドリ	18
7	メジロ	13
8	タヌキ	13
9	シジュウカラ	12
10	ハクセキレイ	9



ツミ（神奈川県では繁殖期・絶滅危惧Ⅱ類）
県内には夏鳥として飛来する。7月に巣立ち
前のヒナが保護された。保護原因は不明。



クイナ（神奈川県では非繁殖期・絶滅危惧Ⅱ類）
県内には冬鳥として飛来する。11月に幼羽が残る
若鳥が保護された。保護原因は不明。

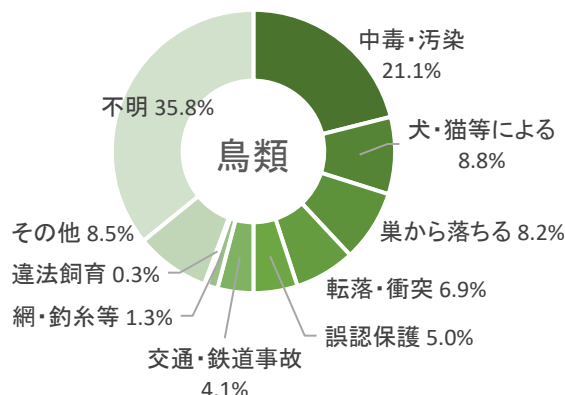
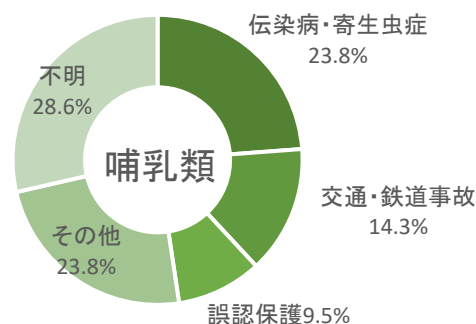
私たちが野生動物がけがを負う瞬間を目撃することは少ないため、救護原因は不明となる場合が多いですが、受付時の聞き取りやケガの状態から判明、推察された救護原因の割合は右グラフの通りです。

哺乳類でもっとも多い「伝染病・寄生虫病」とは主に疥癬症で、すべてタヌキでした。「誤認保護」もタヌキで、親の帰りを待つ幼獣を仔ネコと間違えて連れてきてしまったケースがありました。

鳥類では「中毒・汚染」が4年連続でもっとも多くなりました。油による汚染などありますが、ネズミ捕りやハチ駆除用等の粘着シートにかかってしまうケースがほとんどを占めています。（疥癬症や粘着シートについては第42号参照）

339件の受入れがあったうち、3月31日時点で、放野に至ったのは131件で全体の39%でした。この割合もほぼ例年通りです。その他21件は治療が継続されていたり、長期的な飼養のためボランティアに預けられたりしています。

このように、救護の記録をまとめて振り返ることで傾向がわかり、私たちはどんなことに気を付けたいのか考えるヒントになることもあります。気になる方はぜひホームページをご覧ください。

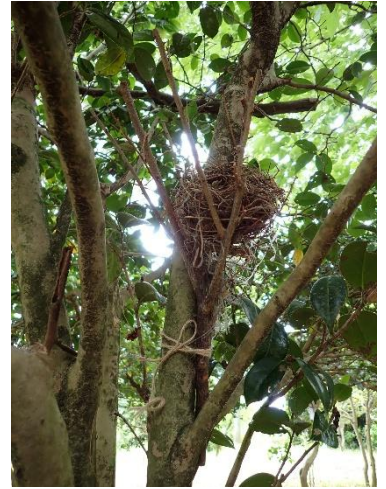


R7年度 救護原因の割合

子育てシーズンの伐採・剪定に注意

春から初夏にかけて野生動物たちの繁殖が始まっています。この季節は毎年鳥のヒナや幼鳥、哺乳類の幼獣に関する相談が増加します。4月早々には卵からふ化したのフクロウのヒナが運び込まれました。枯れかかった木を伐採したところ、樹洞がフクロウの巣として利用されており、ヒナが取り残されてしまったため、保護されることになりました。職員一同、四苦八苦しながらの子育ての様子は今後ご紹介する予定です。

フクロウが巣を作るような樹洞のある木の伐採は稀ですが、一般家庭では、キジバトやヒヨドリ、メジロなどが庭木に巣をつくることもあり、伐採や剪定によって巣を壊してしまったという事例はよくあります。巣作りや子育てが始まる前に剪定を済ませておくことができればよいのですが、5月～7月頃に剪定を行う場合には、まず鳥の巣ができていないか確認してみてください。卵やヒナがいる鳥の巣の撤去は、法律によって原則禁止されています。キジバトやヒヨドリなどの身近な野鳥の場合、卵を産んでからヒナが巣立つまでは3週間～1か月程度なので、巣立ちを待って剪定するとよいでしょう。また、巣に気づかずに枝を切ってしまうと、近くの木などにそのまま括り付けておくと、親鳥が戻ってくる可能性があります。とくにある程度成長したヒナがいる場合には親鳥もあきらめずに子育てを継続することが多いようです。卵やヒナを人の手で育てるのは非常に難しいため、できる限り親鳥が子育てを継続できるように見守ってください。



枝ごと木に括りつけた巣

あつぎロードギャラリーに出展「巣立ちヒナをひろわないで！」

野鳥の繁殖シーズンには、巣立ち直後のヒナ（巣立ちヒナ）が誤って保護される誤認保護も多くなります。親鳥から自然の中で生きていく術を学んでいる大切な時期に親鳥と引き離してしまうことになるので見守りをお願いしています。

スズメやツバメなど、誤認保護が起こりやすい身近な野鳥について広く知ってもらうため、5月22日から6月17日までの間、あつぎロードギャラリー（厚木バスセンター西側地下道）にパネル展示を初出展しました。



神奈川県農業技術センターからの果物提供

農業に関する技術開発や普及指導を行う神奈川県農業技術センターでは、研究のためにさまざまな果樹や野菜が育成されています。生産された作物の中で、傷んでしまい廃棄せざるを得ない果物の一部を傷病鳥獣救護業務のために活用させていただいています。

昨年度はミカンやカキ、リンゴなど約100kgの果物が提供されました。ボランティアの方々と一緒に小分けにして冷凍保存するなど、1年を通じて動物たちに与えています。熟成したカキは交通事故などで保護されたタヌキたちに大人気で、ドックフードなど普段与えている飼料は食べないのに、果物は食べるという個体もいるほどでした。ミカンやリンゴは、木の実や花の蜜などを主食とするヒヨドリやメジロなどの鳥類にとって大切な栄養を補うことができます。動物たちを飼育するうえで欠かせない食糧確保。これからもさまざまな機関の協力をいただきながら、多様な動物に対応できるように準備していきます。



ミカンを冷凍するため仕分け中



ミカンとリンゴが入ったヒヨドリ用の餌

農業技術センターの皆様、
ご協力ありがとうございました。